「漢代「順気行罰」考」

| その他のタイトル | 他者のタイトルを記載
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>影山 輝國</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>東洋文化研究所紀要</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>6ページ</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2017年</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15083/00027098">http://doi.org/10.15083/00027098</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
漢以前に順気行罰が実施されていたか否かを示す具体的な証拠は、今のところ発見されていない。ただ刑の執行時期について、後漢の章帝の時代、曾祖父以来律令の習得家業としていた陳寵の上奏文の中に、「後漢書」(陳寵伝)に読みたい言葉がみえる。三微と行なったというのである。陳寵が何を根拠にこのように言っているのかは不明だが、一千年以上も前の前代の刑罰執行時期については確かな証拠を持っていなかったから考えられず、歳首に流血して民心や天意に背くことがあるはずはない。また、四時を問わず刑を執行していたことを非難している。陳栄は関近でこれをなお客らしく信ずし得る。一九七五年、湖北省雲夢県陳家港から出土した秦律において、刑の執行時期を規定した条文に見当たらないようだ。無論、出土したものが秦律のすべてではないけれども、判決が下されたならば直ちに刑が執行される「四時行刑」こそ、秦に限らず刑や周でも普通であったのではないかと思われる。
ただ、ここにあるのは順気行罰が行われていたのではないかと疑わせる資料がある。その一は「春秋左氏伝」で、

【襄公二年】

中国古代の学者や、『春秋左氏伝』はその著作時期について大きな問題のある書物であり、それ以前漢末まで引き下げての記述は信頼できる。当時、同様の述評をされている学者もいるくらいである。たとえばこの場合でも、中国史書の通例として、人物の主要な行動や重要な事件についての記述が重要である。

【襄公二十六年】

湯土などを指している可能性もある。あるいはただの謎ともとろくない時代の事件を述べた場合、「古之治民者」とは一体誰のことかという可能性がある。声子がこの言葉の直前に、殷の湯土が刑罰を濫用しなかったために天の福を得たと述べているから、殷の湯土のことを治める者」と持ち出すのは相手を説得するための常法手段であって、彼自身の貢献を自慢するために言っているのである。彼の友人である楚の伍舉は罪を犯して逃亡して以来、なんとか彼を楚に復帰させようとするが、これが楚にとって一大損失である。声子にとっては「賞を勧め刑を考えて、民を治めさせていた」と言っている。春秋の襄公二年（前五七）が確認される最も早い順気行罰思想の出現時期となればならばならなくなる。順気行罰思想の根拠に陰陽説があるとするならば、陰陽説は戦国時代に生まれたと
東洋文化研究所紀要 第三冊

四

されるのが会定であるので、声子の言葉は後世の創作である可能性が極めて強いのであるが、たとえ陰陽説を知らなくても、物事が春夏に生長し、秋冬に衰えるのは容易に認知できるであろうから、安易にこの時代に順気行罰思想が無かったとも断言できないのである。しかし、春秋時代以前に順気行罰思想あるいはその実施を示す資料は今も存在しない。従って、かかるものを、不思議なことになる。を仮に文書上に『法経』について言及したものではない。ところで、 COLL.2、13761

『法経』にあたるものかも知れないが、『法経』は『李悝法典』の逸文を輯めており、その『法経』の一部に『立春後不決死刑』と題する一条がある。よって、『法経』における文書、『法経』の一部は、『法経』である。なにせ、、『法経』に於いても、もしくは、断簡月日及災殺日には死刑を執行した者は杖打ち六十の刑に処する。この意味で、、ますます順気行罰思想を是正する必要がある。
規定である。したがって戦国時代における討罰制度は、すべて『唐律』の条文なのである。

『盗法』から『詐偽法』から『捕法』から『断獄法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法』から『名例法』から『論法』から『捕法`
東洋文化研究所紀要
第百三十三冊

六

戦国の時の韓などを見ますと、この精神を最もよく実行して居ります。と述べていることである。さまざまな文献にあたってみたが、戦国の韓で順気行罰が行われていたことを示す資料は見当らず、桑原氏は根拠にこのように述べているのかわからなかった。もともとこの論文は講演筆記であるので、桑原氏の言い違いか、あるいは筆記者の聞き違いなどの可能性があるかも知れない。

以上、漢以前において、順気行罰が行われていたことを示す確たる証拠は見当たらない。ここの論文は講演筆記であるの。

順気行罰の思想が述べられているのは、前引の『春秋左氏伝』をひとまず除外すれば、すべて戦国時代以降に書かれたと思われる文献である。最も早いと思われるのは「管子」で、その四時篇に、

二

順気行罰の思想的背景

「春」解怨、赦罪。

冬、断刑、致罪、無罪有罪。
冬至は、君主が聴朝、論罰罪、刑殺。

八、令章、論罰罪、刑殺。

と言って、どちらも春の徳賞に、冬の刑罰を対置させている。同様に、幼官篇にも、冬の寛大な節気に「刑を尽くす」

と述べている。これらの篇では、刑罰は冬に執行されることになっているが、別の篇では刑罰は秋に執行されることになる。

また、刑の執行は秋から冬にかけて行われる「秋冬行刑」の説を理解するのが重要である。特に秋か冬かで思想的に後述の「夏至冬至間行刑」説を生み出すこともあるのである。

秋、母教過誤罪緩刑。

秋、行五刑、誅大罪、所以禁淫邪、止盗賊。

徳始於春、長於夏。刑始於秋、流於冬。

そのあること、刑の執行は秋から冬にかけて行われる「秋冬行刑」の説を理解するのが重要である。

陽為德、陰為刑。

陽は冬至に萌し、次第に勢いを増して夏至に極盛となるという考え方がある。特に秋か冬かで思想的に後述の「夏至冬至間行刑」説を生み出すこともあるのである。

漢代「順気行刑」考。
戦国末に編纂された呂氏春秋の十二篇にも順気五行の思想が見える。春の、
仲春の呂有司、省園圃、去榛橕、無肄掠、止狱訟、
とあるのに対置して、秋には、
仲秋の呂有司、修法制、締園圃、具榛橕、禁止斬、慎罪邪、務搏執、命理。
正平、戮有罪、謹斷刑。

孟秋の呂有司、申減百刑、斬殺必當、無或桎橕。

季秋の趣獄刑、無留有罪。

仲秋の呂有司、申減百刑、斬殺必當、無或桎橕。

子取怨于下、其有若此者、行罪無赦。

仲冬の呂有司、申減百刑、斬殺必當、無或桎橕。

孟冬の呂有司、申減百刑、斬殺必當、無或桎橕。

子取怨于下、其有若此者、行罪無赦。

管子と異なる点は、孟夏の月にも軽微な罪を罰するとき、
孟夏の月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、未若この理由につき、
孟夏の月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行わないのであるが、
遠導の高誘は「是月は陽気上に盛んなり。五月に及 Theft 刑を行ない
『淮南子』時則訓と『礼記』月令篇に見られる。孟夏の月も、
『禮記』月令篇に見られる。「秋冬行刑」の如し。春に及びて陰気下を
と、ほどど同文である。そこで時則訓に附せられる高誘注を数えると,
四月は陰気上に盛りなり。五月に及びて陰気下を
と、同じようなことである。そこで時則訓に附せられる高誘注を数えると,
四月は陰気上に盛りなり。五月に及びて陰気下を
と、同じようなことである。そこで時則訓に附せられる高誘注を数えると,
四月は陰気上に盛りなり。五月に及びて陰気下を
と、同じようなことである。そこで時則訓に附せられる高誘注を数えると,
三 前漢における順気行罰

① 武帝元光四年（前一三二）
故以十ニ月詣、論案市潰城。

魏其侯賢賤渭城で案出された記事だが、張愛の注に「著日月者、見春成至、恐遇赦賞之」とあるように、わざ

を示すものらしい。

② 武帝元狩四年（前一一九）

尽十二月、河内、郡中無犬吠之盗、其頗不得、失之旁郡。追求、會華、温舒頓足駄日、昭乎、令冬月益展

一月、卒吾事矣。

（漢書・酷吏伝。又は史記・酷吏伝に似、考える）

九月に太守として河内郡に乗り込んだ王温舒は徹底的に無法者が取締り、十二月も終わる頃に郡中にはこ

泥がいなくなった。捕まえられなかった少数のものは隠の郡に逃げた。追いかけ求めうる春になったので、王温舒

は地図騎馬んで「ああ冬がもう一月延びていたら、吾が事をやりおせたものを。」と歎いた。顔師古の注にも

「立春之後、不復行刑、故云然」とある。

（漢書・司馬遷伝）

司馬遷が獄中の人任少卿に与えた書信の一節で、季冬が追ひ更、死刑執行が間近の友の身を案じている。

（漢書・外戚伝上）
げたところ、一人とも「死んでも悔やみません。」と言った。

東海太守尹翁帰は所轄県の寄吏や土地の頼役などを逮捕し、取り調べて、重罪は死刑に処した。逮捕するのは必ず秋の役人の成績を聴取の大会中、及び県を巡査する時で、平素無事の時ではなかった。これは必ずしも順気行詰の解釈も成り立たず、

慶延元年（前六九）（甘露元年（前六五）の間）

定国食酒至数を不乱、冬月治簿案、飲酒益精明。

延尉于定国は酒を数石飲んでも乱れることなかった。冬月、郡守から判決が難しい案件が回ってきたのが、飲めば飲むほど見事な裁断を下した。なお、冬に上級官庁へ判決案の可否を尋ねる請讞を行ったことは、『英書』刑法志

にも「於是選于定国為廷尉。季秋後請讞」と見える。

河東太守故延年は冬月に所轄県の囚人を郡の役所に集めて処刑した。流血数里、河南の豪族は彼を「廬伯」と呼んだ。また次のような話も伝わっている。

漢代『順氣行詰』考
嚴延年的母は十二月の晝墓を息子と一緒に過ごすため、東海郡から洛陽までやって来た。また出郡の役所には足を踏み入れなかった。

（同右）

『宣帝甘露元年（前五二）』

張敞 使虞撫察刺舞有司案驗。：舞曰「吾為足公尽力多矣，今五月京兆耳安能復案此」敞聞舞語，即部吏収

舞繖。是時冬月未盡数日，案事吏長夜騐治舞，竟致其死事。舞當出死；敞使主簿持教告舞曰「五月京兆竟何如。」

『漢書・張敞伝』

（漢書・劉向伝）
更生の罪を繰った。宣帝も更生の才能を高く評価していたので、冬を越して死刑を免れることができた。ここに服度は注を「続冬、至春行寛大面減死罪」と、得死と減死也」という。顔師古は「服説是也」というが、からみて、如説も正しいと言えよう。

弘農太守張匡坐減百官以上、死猶不道、有詔卍即訖、惡下獄、使人報（陳）湯。湯為詐罪、得睹冬月、許謝錢二百方。

『漢書』（陳湯伝）

以対、伏誡重誅、時冬月尽、其春大赦、不治。

梁王劉立は畏って、冠を脱いでこたえて言つた。「いま立は中郎曹将を殺害したことを認めます。冬を越えて立を絶えようと願ったのです。」事実を知り、重い罪を待つます。立が終わり、春に大赦があつて、処罰されなかった。

⑭哀帝建平三年（前四）

延熹案相与丞相長史、御史中丞及中郎中石緒、東平王郭倉。時冬月未尽二旬、而相心疑寛大、獄有餘論、奏欲傳之長安，更下公卿覆治。大夫以相等皆見上体不平、外内願望、操持有心、幸雲連冬，無討賊疾患主髪之義，制
廷尉梁相は相頭長史、御史中丞及び五人の二千石と、東平王劉雲が哀帝を呪詛した事件を共同で裁いた。冬月が終るまでに二十日あるので、相は梁が冤罪で、調書にも嘘があると思っている。雲の身柄を長安に移し、あらためて公卿に再審してもらうと奏上した。哀帝は相が天子の体が健康でないのを見て、諸侯王と天子の勢力を見比べ、二心を抱き、雲が冬を越すのを願い、戦を討って主の仇を親む心がないことを理由に、詔書を下して相を罷免し、庶民とした。
その二年後の元壽二年（前二〇）梁相を弁護したために獄に繋がれた王嘉は次のように述べている。
王嘉は心をいただいて言った。「始めが見えるところ、相らが先に東平王劉雲の獄を裁いた際、雲は死罪に当たらないとし、そのを出て冬を越すことができないのである。公卿に問われても答えられないからです。諸侯王と天子の勢力を見比べ、阿附して雲のためを図った証拠はまっ
₅₆「陰陽刑德」の説が見られ、さらに、
「陰陽刑德」の説が述べられていることである。その対策の年次については建元元年（前四〇）の例よりは三年前である。したがって董仲舒は対策中、天人感応の具体例として「陰陽刑德」を挙げておき、積極的に「秋冬行刑」の施行を訴えてはいないので、たとえば「秋冬行刑」の施行が董仲舒の建言にとづいて、「秋冬行刑」が実施さ
れた可能性もあるのであるが、董仲舒は対策中、天人感応の具体例として「陰陽刑德」を挙げておき、積極的に「秋冬行刑」の実施を訴えてはいないので、たとえば「秋冬行刑」の施行が董仲舒の建言にとづいて、「秋冬行刑」が実施され
たと考えられる。そこで思い起こすのは、武帝に対して、百家の学を廃絶し、儒家の学を尊すべきことを建言し
た董仲舒の対策の中に、
天道之徳在陰陽。陰為德、陽為刑。刑主殺而德主生。
という「陰陽刑德」の説が見られ、さらに、

春者天之所以生也。仁者君之所以愛也。夏者天之所以長也。德者君之所以養也。雷霆天之所以殺也。刑者君之所

【第一次対策】

【第二次対策】

【第三次対策】

漢代「順気行罰」考

《後漢書》陳震伝

一七
と述べている。「漢書」・『刑法志』に言及され、「改従簡易」とは、高祖が秦の苛法を省き、「殺人者死、傷人及び盗徒罪」というわけである。「法三章」を定めたことを指すのである。その後、秦は秦が法に基づいて九章律を作った。

その後、季秋九月に判決処刑を始め、立春の月は避けたが、周と殷の二王朝の廃首として十一月（天の正）、十二月（地の正）でもかまわずに刑罰を執行したという文言である。陳隠の言葉によれば、漢初から「秋冬行刑」をはじめ漢の法制度はみな蕭何の功に帰せんとし、かつ「四時行刑」した秦との違いを際立たせるための発言ではないかとも思われる。したがって武帝以前の順気行罰の実施は、今のところ不明といわざるを得ない。

四 新莽期の順気行罰

王莽は順気行罰を守らなかったとして非難される人物である。たしかに彼は、地皇元年（〇〇）正月乙未、下書し、軍の進発にあたり、法を犯す者は直ちに斬首する。というこの年限りの臨時の法を定めたため、国都など大々的な市販の刑法においても同様の事情があった。下書日「方丈軍行師、有司詣墨犯者、輜轡轝、周倉時、尽歳止」。京師春初新人都市、百姓震懾、道路以目。
更にこの法令の延長を図った。

又下書曰【惟設此壹切之法以来，常安六鄉巨邑之都，枹鼓稀鳴、盗賊哀少、百姓安土、歲以有年、此乃立桓之力】

【『建元』というのは地上元年までのことと思われるが、こののち各地に起きた反乱にとって、新は地皇四年十月に滅亡しているから、地皇三年以後再び順気行罰が復活したか否かははっきりしない。この臨時の法はすくぶる評判が悪く、王莽の罪状の一つに数えられている。莽・莋はその後の光武帝、劉秀に挙兵を勧めた際、行炮格之刑、除順時之法：此其逆人之大罪也。と言っているし、餘国が郡国に発した王莽討伐の檄文にも、と書かれている。】

ただ、王莽の時期に順気行罰を守っているような記事もあるが、莽は怒って直ちに餘国を逮捕下獄、大逆罪を求刑した。彼は獄に繋がれて冬を待ったが、たまたま赦にあって出獄できた。というのである。莽大怒、即収繋詔獄、効以大逆。遂繋須冬、合赦得出。

後漢書【馮異伝】
後漢書【馮異伝】

漢代【順気行罰】考

王莽だけが【秋冬行罰】を守らなかっただけでなく、前漢時代にもすでにそれを守らなかった官吏もいたようである。
元帝永光元年（前四三）には、諸葛龐が以春夏夏夏生人（「漢書」諸葛龐伝）の理由で、京師近郊の犯罪者を追捕する司隷校尉から長安城門を守る城門校尉に配置換えられている。

また、元帝建昭五年（前三四）春三月の詔には「方冬農桑興、今不良之吏、覆案小罪、微召証案、興不急之事、以妨百姓、使失一時之作、亡終歲之功」（「漢書」元帝紀）とあり、春の農業期に軽微な犯罪を取り調べ、「農夫を拘束して耕作を妨害する役人がいたことが知られる。

さらに延和二年（前七）に、哀帝から災異が顕発する理由を尋ねられた李尋は、「間者春三月治大獄、時賜陰立逆」（漢書・李尋伝）が原因であると述べている。

いったち「秋冬行刑」とは、天時に従うことを目的とするが、同時に、春夏の繁忙期に農民を取り調べたりせず、農耕や養蚕を妨げないようにすることをねらったものでもあった。しかし現実問題として、春や夏で目の前にいる犯罪者を逮捕しないわけにはいかず、取り調べは秋からにしても、それでも獄中で拘束するのが普通であったようだ。

（州郡） 又欲避諱之比、軒詣疾病、多死牢獄。長吏殺生自己、死者多非罪。

（後漢書・襄楷伝） 質帝永焉元年（一四五）五月、京師の獄に繋がれる死刑以外の未決囚は保釈し、立秋になって取り調べを再開するよ
五 后漢における順気行罰

光武帝の頃、順気行罰はどうなっていたかの明証はないが、おそらく新法の混乱からあまり遵守されていなかったろうと推測される。そこで次の明帝の時代、以下の様々な提案がなされたり、詔勅がたびたび発せられたりして、秋冬行刑の復活が見られることが出来た。明帝は即位当初、次のような詔を下している。

「秋春行刑」の復活が見られることと、論議されもなおなかったのである。

中元元年（五八）に、長水校尉樊修が議論は時気ずに秋にかえってからすべきことを見計して、明帝はそれに従った。
これ以後も、明帝はたびたび詔を下して、時命に従うよう有司に求めている。永平三年（六〇）春正月辛亥、詔曰：「有司観時気、詳刑慎罰。」
同四年（六一）春二月辛亥、詔曰：「有司観時気、詳刑慎罰。」
後には「永平旧典」と呼ばれるのは、これらのことを指したのではないかと思われる。
明帝の後に続く章帝も初めは同く「秋行刑罰」を詔えた。

建初元年（七六）春正月丙寅、詔曰：「宜及秋行刑罰。」
元和元年（八四）秋七月丁未、詔曰：「宜及秋行刑罰。」
元和二年（八五）春正月乙酉、詔曰：「春行刑罰。万物萌中。宜助萌陽、以育時物。其令有司、罪非殊死者、須立秋案罰。」

秋七月庚子、詔曰：「律十二月立春、不以報冬。月令冬至之后、有順陽助生之文、而無節氣斷刑之政。朕以
為王者生殺、宜順時気。其定律、無以十一月、十二月報冬。」

ともに「後漢書」章帝紀

同左

秋七月庚子、詔して言之：「律の規定では十二月に立春がある場合、囚人を処刑しない。月令に十一月の冬至の
後は、陽気に順い生を助けるという文はあるが、詮問処刑をするという政はない。王者たる者は、牛殺は時気に順べば、顕在のようにあるのである。十一月、十二月は処刑しないことを律令に定めよ。この詮により十月、十一月、十二月の三冬を行われていた刑の執行が、十月のみに限定されるようになってきた。

この頃に、断獄皆以冬至之前、肅宗之時、断獄皆以冬至之前とあるのはこの事である。十月だけでなく、冬至のある十一月の全期間、刑の執行をやめてしまったのであるが、『断獄皆以冬至之前』とあるように冬至の前まで刑を行える理屈で、詮に『月令』を引用していることからも知られる如く、これは前に述べた『呂氏春秋』十二紀、『淮南子』時則訓、『礼記』月令篇に見える『夏至冬至間行刑』説に他ならない。だしこの時には刑の開始時期を夏至は問題にされず、軽微な罪の取り調べや処罰の開始は従前通り立秋のままだった。夏至が議論されるのは次の和帝の時である。

さて、重罪の処刑が十一月に限られた事に対して反対論がまき起こった。たまたま起初た元和二年の旱魃に事寄せて、長水校尉の賈宗らが断獄が三冬を尽くさなかったので、陰気な微弱のまま陽気が泄れたため、旱魃を招いたのであると上書した。

漢代『順気行罰』考
この記事では、夏至と冬至の間の刑罰に関する内容が記述されています。特に、選出の役割で夏至に起こり、稲穂が起こると、軽微な罪を罰してはいけないという法律が作られ、その罰を裁くための手続きが定められました。さらに、この法律は法律の改定が行われ、特に夏至の刑罰が厳しくなったという郭りです。

このような法律制度が作られた背景には、古代中国の法律制度の発展が考えられる。夏至と冬至の間の刑罰制度は、古代中国の法律制度の一部であり、その発展は法律制度の発展の一環として理解されるべきです。
た魯類である。彼は先ず相対の時の「盛夏断獄の判刑」を打つと、大略次のように上疏した。旧制度において軽微な罪は立秋になってから処罰したが、永元十五年以降、孟夏から改められた。このため孟夏に農夫を出頭させ、いっとままで拘束して取り調べを行っている。これは天の時に逆らい、農業を妨げるもののだ。「月令」に「孟夏に薄刑を断じ、軽刑を出す」とあるのは、軽微な罪は判決後長いと罪人を拘束しないようにするため、直ぐに処罰し、釈放するという意味だ。孟夏の制度は「月令」の主旨に従うべきで、取り調べや判決は立秋から始め、天の時に従い万物を育成す

旧制至立秋乃行薄刑、自永元十五年以来、改用孟夏、因以盛夏微詐農人、拘対考灸、逮捕無已。上逆時気、下傷農業。月令「孟夏断薄刑」出軽刑。二、夫斷薄刑者、謂其軽罪已正、且欲令久繫、故時断之。臣愚以為今孟夏之制、可從此令、其決獄案考、皆以立秋為斷、以順時節、育成万物、則天與以和、刑罰以清矣。

彼の主張は「月令」孟夏（実は秋）の時令は軽微な罪の処罰に限定されるもので、これを拡大解釈して重罪の取り調べや判決を盛夏に行っていたから、立秋を待って、ということなので、「月令」の時令を正曲きって否定してはい

元和二年の改律以来、不作続き、穀物の値はいつも高く、人民の暮らしは楽ではない。天子の意を解さない役

漢代「順行食図」考
元は十一月にあって死罪の処罰を受けることは、無罪者があつても閑どうとしない。無罪の者があつても伝えず、王道に傷がつくのだから、多いの者ならば尚も立春がある場合は従来通り処刑は行われない。結局これが施行されることとなり、陳寵の主導で章帝、和帝の二代にわたって実現した「月令」の「冬至冬至間行刑」は、安帝の時に至って、農業生産を妨げ、取り調べが不十分で冤罪を生むという理由から、魯恭によっても再び「秋冬行刑」が後漢末まで制度的に行われることになったのである。
こうして「秋冬行刑」が後漢末まで制度的に行われることになったが、前漢後半期と同様、後漢の後半期も「秋冬行刑」を遵守しない事例が多い。
順帝永建元年に「去冬行刑」が行えず、農業生産を妨げ、取り調べが不十分で冤罪を生むという理由から、魯恭によって退けられることもある。
陽嘉二年（一三三）正月、〈顔〉曰：「今立春之後、火卦用事、當溫而寒。」違反時節、由功賞不至、而刑罰必加也。宜須立秋、順風行刑。
顔顗曰：「今立春之後、考事不息、秋冬之政，行乎春夏。故白虹見春，掩蔽日曜。」
（ともに「後漢書・顔顗伝」）
桓帝延熹八年（一五六）、たて続くに起きた火災に対してなされた陳蕃らの上疏なども、春に処刑が行われていたことを示すものであろう。

陳蕃、劉郃、劉茂上疏議曰「……前始春而獄刑懸、故火不炎上……」

雲帝の時、沛国の相であった王吉は、罪人が殺すと車の上に死体を乗せ、その罪名を書き記して、属県を回った。

夏で死体が腐ると、縄で骨を縛って運び、沛国をあまねく回ってやったと止め、これを目のした者は驚愕したという。

冬に処刑した死体が一郡（沛国）を巡るうち、夏になって腐爛したとも考えられるが、沛国はさほど広くはないから、夏に処刑したものであろう。

冬だけでなく、春と夏の刑罰を行っているのは、綱紀が弛緩してきていたためだと考えられる。しかし、そもそも天人感心という観念の所産を、実際の人間社会において法規として具体化した「順気行罰」自体、かなり無理のある制度だったと思われる。人間社会の犯罪は春夏秋冬いつの季節にも起こり得る。にも関わらず、犯罪者の逃亡を防ぐ意味からも、容疑者の逮捕は春や夏にても行われるならず、秋に取り調べを始めるまで、身柄を拘束せねばならない。軽微な罪を犯した者や、冤罪の者にとって、いや重罪を犯した者にとってさえ、労苦な環境の中で、長く耐える難い獄中生活を送らねばならなかったのである。郡や県でも多数の罪人を長期間拘留するにはかなりの経済的負担を強いられたであろう。そうした点から観ると、春夏の刑罰実施は、日常的に起きる犯罪を取り扱う県や郡の役人達のきわめて現
実的対応の現れであったともいえるのではあるまいか。

「順気行罰」の実施は確認できるものとしては前漢武帝の頃からであった。前漢時代は「秋冬行罰」であったが、現実には、春や夏にも刑罰が執行された例もあり、天子はたびたび詔を発して時令に従うよう求めている。天の時相に基づき、民の農業を妨げまいとする「順気行罰」の理想の陰には、儒家経典の権威に裏打ちされたこの制度は、漢の滅亡後も引き続き各地で行われるようである。

1 漢代における刑罰と季節の関係を考察したものに、西田喜二郎「中国刑法史研究」（一九七四年、岩波書店）第九章「刑罰」に詳しい。

2 「順気行罰」は「後漢書」郎顗伝に、「順時之法」は「後漢書」陳寔伝に見える。

3 例えば、『塩鉄論』論導論に「春夏生長、秋冬殺斬」、利以行仁、利以施刑」とある。
諸説の成立は、戦国中期末から戦国末期の初めにかけて、さらにその一部は桑原の際よくなるものがあるとする。

金谷浩は前掲書「時令思想」において、「呂氏春秋」「淮南子」「礼記」など後出の文献では、秋に刑罰を行うとあるから、秋

11 かかの違いは、呂氏春秋」「淮南子」「礼記」など後出の文献では、秋に刑罰を行うとあるから、秋

12 かかの違いは、呂氏春秋」「淮南子」「礼記」など後出の文献では、秋に刑罰を行うとあるから、秋

13 かかの違いは、呂氏春秋」「淮南子」「礼記」など後出の文献では、秋に刑罰を行うとあるから、秋

14 かかの違いは、呂氏春秋」「淮南子」「礼記」など後出の文献では、秋に刑罰を行うとあるから、秋

15 かかの違いは、呂氏春秋」「淮南子」「礼記」など後出の文献では、秋に刑罰を行うとあるから、秋

16 かかの違いは、呂氏春秋」「淮南子」「礼記」など後出の文献では、秋に刑罰を行うとあるから、秋

17 かかの違いは、呂氏春秋」「淮南子」「礼記」など後出の文献では、秋に刑罰を行うとあるから、秋

18 かかの違いは、呂氏春秋」「淮南子」「礼記」など後出の文献では、秋に刑罰を行うとあるから、秋
東洋文化研究所紀要  第百三十三冊  

32 ずっと後の唐代のことになるが、『断刑論下』を著して『秋冬行刑』を批判した柳宗元は『使犯死者自誓而罰其誹、欲死不可得』の三言三事、加豊論を而致之獄、更大著者数月、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得書、癒不得さ

33 もっともこれは司録校尉盧詔が大銭、大銭、中実寺での収銭をあまりに厳しく故発したので、三公うち反反ししたものであり、

卢詔は『臣所奏懐、懐罪非、臣恐為臣所奏、遂加詐罪』と弁明しているので、『顧望多拘繫無』は盧詔を陥れるため

の口実で、事実ではないかも知れない。